

野生動物：ハブ

琉球列島の固有種であり、奄美大島全域に生息する毒蛇「ハブ」は、長年にわたって人々を畏怖させてきました。平均で体長 1.3 メートルまで成長するハブは、人間よりもはるかに昔からこの地域の島々に住んでいます。科学研究の結果は、ハブが約 1000 万年前に中国南部の近縁種から分岐したことを示唆しています。長年の間に、ハブはそれぞれの島で進化し、島ごとに異なる特徴を持つようになりました。ある個体の大きさや色、形状、さらには毒の成分から、それがどの島のハブなのか容易に判別することができます。

ヘビ退治の報奨金

ハブは奄美大島における日常生活の一部であるため、島民は子どもたちにハブとの予期せぬ遭遇にどう対応するか教えるなど、ハブと共存することを学んできました。農家やタクシーの運転手といった日常的にハブに遭遇する可能性の高い人たちは、ハブを捕まえる棒や捕まえたハブを入れる箱を携帯しています。捕まえたハブを市町村の指定する場所に引き渡すと 3 千円の褒賞金がもらえます。島を訪れた人は地元の商店やスーパーマーケットでハブ捕獲用品が売られているのを目にするかもしれません。ハブの皮や骨などで作られた土産物や工芸品が専門店で売られており、また、万能薬として丸ごとのハブをアルコール漬けにすることもあります。

マンガース問題

フイリマンガースは 1979 年にハブを駆除するための的外れな試みとして輸入されました。不運なことに、島にはマンガースの天敵はほとんどおらず、農作物に被害を与え、アマミノクロウサギやカエル、鳥類などの他の多くの在来生物を捕食する侵略的外来種となりました。環境省が開始したマンガースによる被害を食い止め、罠などで駆除する事業が成功し、在来生物の個体数は回復しつつあります。